

はじめに

藤田 佳久

愛知大学東亜同文書院大学記念センター長



愛知大学東亜同文書院大学記念センター「オープン・リサーチ・センター年報」第5号をお届けする。本号は本シリーズ最終号になるが、次年度以降も何らかの形でつなげられたらと願っている。

というのも周知のように「オープン・リサーチ・センター」は文科省の学術高度化推進事業のプログラムで、当記念センターは2006年度から本年度までの5ヵ年間認定され、それにとまなう年報に多様な諸事業を記録し収録してきた。シンポジウムや講演会、研究会の発表内容記録から、全国各地およびシカゴでも行ってきた記念センターの展示会や講演会記録、そして若手研究者を中心にした論文や研究ノート、そのほか雑録や広報活動記録や各新聞紙上への掲載記事まで、多様ではあるが、記念センターの毎年の活動と成果が蓄積され、情報発信の役割を果たしてきた。

本号も本年の活動を記録している。国内シンポジウムでは、愛大創設時に大陸から引揚げて入学した書院およびそれ以外の大学や高等専門学校の卒業生が出身校と愛大を語る初の試みを行った。それより前、それに関連して京都で大陸にあった日本の高等教育機関と東亜同文書院についての講演会と展示を行った。また8月には愛知大学を創設した本間元学長の出身地に近い米沢で、本間元学長を中心テーマとした講演と展示会を行った。そして、最後のクライマックスとして名古屋松坂屋で「東亜同文書院から愛知大学へ」のテーマで近衛家、荒尾精、孫文、中国アジア調査、日中交流をキーワードとして用いた展示会と工藤美代子氏を招いた講演会を行った。地元での開催と中日、読売両紙の紹介もあって、多くの入場者を得た点では幸いであった。

研究ノートでは、日清貿易研究所学生による清国見聞録が収録されている。全体の半分しか掲載できないが、本号に続く研究誌への発展的掲載が出来ることを期待している。

そのほかにもいくつかの報告が収録されており、ページ数の多い「オープン・リサーチ・センター年報」最終号となった。記念センターがこのプロジェクトにより、年々活動が充実して発展してきたことをご理解いただけたら幸いである。

まずは、愛知大学東亜同文書院大学記念センターの「オープン・リサーチ・センター」が、本号で幕を閉めることになったことをお伝えしておきたい。そして別の機会に再び皆様とお会い出来るのを楽しみにしたい。

長い間、ありがとうございました。

2011年3月